

2018年12月

教育格差が生じる原因の究明 ～日本における負のスパイラルを中心として～

経営学部 経営学科 新井ゼミ
B5R11029 小酒部 翼

【卒業論文概要】

学歴社会のシステムは抗いようのない貧富の差を生み出す要因にもなる。勉強へ励まなかった学生は低い社会地位へ就くこととなる。そうなれば、子へ質の高い勉学を提供するだけの収入と知識もないことになり、子ども比較的に低い社会地位へ到達してしまう。この負のスパイラルこそが勉強に対する意識の低い学生を生み出し、貧富の格差を開く大きな要因であることは間違いない。この問題へ注視したきっかけは、2017年度に行われた文教大学と茅ヶ崎市議会との意見交換の中で取り上げられた議論の中にあった。学歴格差と貧富の格差には相関性があると理解しつつも、具体的なデータや根拠がなく、解決するための課題の認識すらままならなかった。

本稿は、教育格差が生み出される具体的な原因やデータを幾つか抽出し、複雑なスパイラルの構図をより鮮明にすることが目的である。これにより、負のスパイラルを解決する手段の発見に至るのではないかと考えた。

そのために、地域格差と教育格差との関連性、補助学習と教育格差の関連性、家庭環境と教育格差と関連性との3つの観点から研究を進めた。

調査・分析の結果、自主性のない子供は大人に育ち裕福な暮らしが可能となる割合は低く、負のスパイラルを生み出す原因であることが究明された。『社会人基礎力』にある12の要素には主体性、働きかけ力、実行力などの前に踏み出す力に加え、考え抜く力やチームで働く力が盛り込まれている。いずれも社会で望まれる能力だが、自主性がなければ伸ばすこと自体が難しい能力である。能力を伸ばせない大人は社会から歓迎はされず、賃金の低い企業へ就職せざるを得ないことが判明した。

読書は国語力を伸ばすだけではなく、自主性において重要な「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」を伸ばせることが文部科学省によって示唆されている。しかしながら、読書文化の重要さは貧困家庭では理解されにくい傾向にある。今後は、義務教育の教育改革のみでなく読書改革にもフォーカスを当て、貧富の差に限らず幼児期からの読書を一般化させることが課題であると捉えることができる。

自主性の育たないしつけや教育が行われているために、負のスパイラルは形成されるという結論に至るならば、幼児期から自主性を育むための土台作りを根付かせることが最適な解決方法ということになり、本稿では、自主性を育む最適な方法とは「読書」と仮定した。また、心理学者の内田伸子によると家庭の蔵書数と子供の知能指数は比例しているという。親自身が本好きで、幼児期から読み聞かせを頻繁に行う家庭の子供は総合的に能力が高いことを鑑み、本研究としての解決方策を提示した。